

# 【最終回】まちづくりとしての小規模多機能ケア

地域におけるまちづくりの拠点としての、  
小規模多機能型居宅介護の可能性と実践について考えていく。

## 小規模多機能ケアの可能性

### 地域包括ケア実践のための 地域密着型サービス

2008年9月号から続いていた私の連載も今号が最後となりました。今回はその総括のお話をさせていただきます。

地域密着型サービスの運営目的を一言で言い表せば、それは地域ケアの実践となるかと思いませんか。地域包括ケアは一般に、「地域住民が住み慣れた地域で安心して尊厳あるその人らしい生活を継続することができるように、介護保険制度による公的サービスのみならず、その他のフォーマルやインフォーマルな多様な社会資源を本人が活用できるように、包括的および継続的に支援すること」\*と定義されているものであり、利用者の生活支援を専門職のみで行う視点ではなく、地域の企業・商店・住民をも巻き込んだ形で展開されていくべきものであると明示されています。そのことを通じて、地域住民の理解や協力を促進し、その意識の変革を

### も試みる実践です。

生活支援における「生活」は本来非常に幅広いものであり、福祉や介護の専門職だけでは到底守れるものではありません。そのことの限界をしっかりと認識したうえで、他分野における専門職および地域住民との連携をもって利用者の支援を行う視点が、今まさに求められているのでしょうか。

連載中にお示ししたように、小規模多機能型居宅介護（以下、小規模）のケアマネジメントには、見守りや軽微な家事支援等を地域住民に依頼することで、利用者の生活の質向上と事業所運営の安定化を図ることができる素地があります。「地域の絆」においても、同居世帯・高齢者のみの夫婦世帯・多くの問題を抱えた世帯に属される利用者の支援に際しては、なるべく多くの地域住民の協力を要請したうえで行うことにしています。

また、地域ケアの視点で事業所の運営を鑑みれば、「徘徊」時の見守りや、災害時の協力等を住民から得ることができ、事業所運営の安定化にも寄与することにつながります。私たちの事業所では、1人で外出された利用者を事業所ま

### で連れてきてくれたり、職員に知らせにくる住民は決して珍しくはありません。

加えて、地域ケアは対象者を限定しない共生ケアの視点も有しており、高齢者に限定しない支援機能を保持することによって、地域の多様なニーズに可能な範囲で対応できるようになり、やがてそれが地域住民との信頼関係の構築へとつながっていくことでしょう。地域の絆各事業所においても、不登校・発達障害・触法といった課題を抱えている児童の受け入れや、障害を持たれた方の就労訓練の場として、小規模が地域に機能している姿を報告してきました。

如上の体験的学習を通じて地域住民に意識の変革を促進する可能性も地域ケアは秘めており、地域ケアの実践を突き詰めるとそこには、誰もが自分らしく安心して暮らせるまちづくりに行き着くことも理解されます。利用者の日常生活圏内で、その居宅での生活に對し、「通い」「訪問」「宿泊」ケアマネジメントの機能を臨機応変に組み合わせて支援を行う小規模には、この地域ケア実践の素地があると確信しています。

### まずは地域に実践を 投げかけていくべき

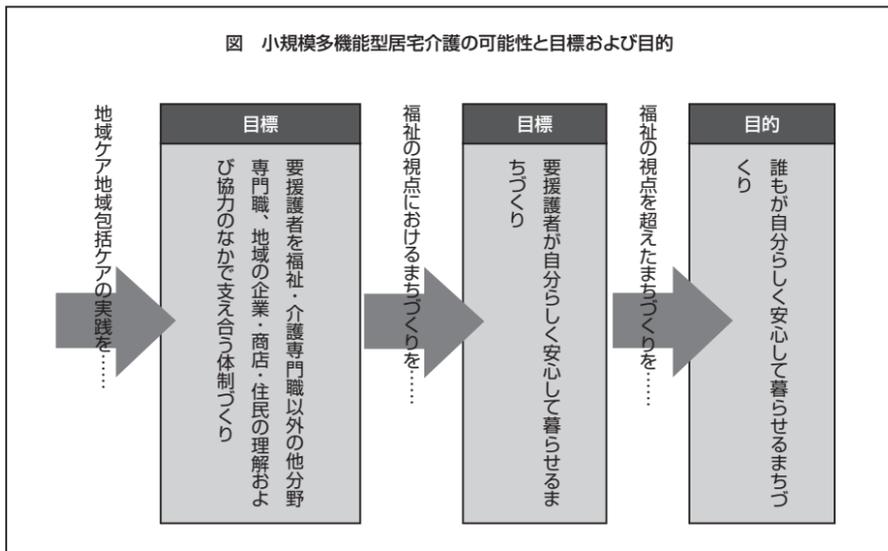
地域の絆の実践のなかで、その推進力となる姿勢は、「とにかくやってみる」というものでした。地域の要援護者を地域住民の協力のもとと支え合っていく実践は、口で言

うほど簡単なことではありません。そのためには、日々の地域住民との交流が欠かせません。悩むべきは、何の手がかりに交流すればいいのかにあるのではないのでしょうか。よく地域住民のニーズに応じた実践が取り沙汰されますが、そんなものは端から知る由もありません。ましてや、コミュニティアセスメントという実践的概念が確立されている様子もないのです。そのなかにあっては、1人の住民のニーズからでもいい、まずは暫定的にニーズをとらえて、とにかくやってみるとい

う姿勢が欠かせないのではないのでしょうか。

地域の絆では、事業所ごとに年3回のイベントの運営を行っています。活動するなかで、①住民同士の交流ができていない、②世代間の交流ができていな

図 小規模多機能型居宅介護の可能性と目標および目的



い、③子どもの育成に必要な地域活動がない——といった形でとらえるニーズが変遷しています。ニーズは常に流動的で可変的なもので、対人援助におけるニーズも同様、大切なのは初期のアセスメントではなく、実践のなかでのかかりとしてのモニタリングや再アセスメントにあるのではないのでしょうか。

したがって、とらえることのできないニーズの把握に紆余曲折する前に、地域に実践を投げかけていくことから始めるべきでしょう。できない理由を考えて何もしないのではなく、気軽な気持ちで仕掛けてみるのが地域交流の第一歩なのだと私たちは理解しています。

それが、本誌でもご紹介したベトナムのキャップ回収であったり、子どもを対象にした書道・茶道等の教室、子ども会の会議場としての事業所の提供、広報誌作成における住民の参画等の実践に該当します。何でも結構です。地域に投げかけて、その反応を見ながら次に投げるものやタイミングを計りながら、また次を投げかけ

### 中島康晴

NPO法人地域の絆代表理事

なかしま やすはる

社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員。1973年生まれ。主な職歴は、生活相談員、介護職リーダー、デイサービス・グループホーム管理者。福祉専門職がまちづくりに関与していく実践の必要性を感じ、特定非営利活動法人地域の絆を設立。現在、広島県内で4カ所の地域密着型サービス事業所を開設運営。

HP: <http://www.npokizuna.jp/>

「代表理事中島康晴のブログ」で社会福祉に対するさまざまな思いを掲載。

いるのではないのでしょうか。もちろん志なく、無造作に投げかけてもそれは決して響くものではないでしょう。私たちがどのような姿勢や思いで地域住民と向き合っているのか。そのことは絶えず問いかけてらるることでしょう。小規模には素晴らしい「素地」があることを2年6カ月の連載を通じてお伝えしてきたつもりです。しかしながら、その「素地」を生かすも殺すもそれは、私たち実践者の姿勢や取り組みによるものと言えます。

長期にわたるおつき合いに、心より感謝申し上げます。

\*財団法人長寿社会開発センター「地域包括支援センター業務マニュアル」9頁 2010年3月